

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

EKIN

五号
2007. 2

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2007年2月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mxi.netwave.or.jp
<http://wwwi.netwave.or.jp/~ekingura>

シリーズ 絵金蔵百話 第四話 冬の別れ



香南市香我美町・絵金資料館所蔵

INFORMATION

香南市のみなさまへ

絵金蔵、二周年。

おどろの闇へ、ご招待いたします。

赤岡の夢と元気をつめこんで出発した絵金蔵が開館二周年を迎えます。そこで、「おかげさま」の気持ちを込めて、**夜間の無料開放**を行います。この機会に昼間とは一味違った夜の絵金蔵の雰囲気味わってごらんになりませんか。皆さまお誘い合わせの上、ぜひお越し下さい。

日時 平成十九年二月十一日 (日・祝)

夜間 *昼間は通常営業致します

十七時半～十八時

(入館は十九時半まで)

場所 絵金蔵 (赤岡町)

🐾 先着二十名様に絵金はがきプレゼント！
(十一～十八日まで。十一日は昼のみです。十三日は休館日。)

夜に無料開放
するわー！



編集後記

今回の年末年始休館は六日間。休みの間、毎日やり残した仕事を思い出し、蔵に来ていました。この六日間が年に一回の大型連休だった事に気づいたのは、開館日前日夕方。何と勿体ない事...と年明け早々ブルーな気分に出動しました。旅行にでも行こうかな...早くも来年のことを考えています。

(蔵長・横田恵)

今回の通信は、この季節にぴったりの作品。と同時に、副蔵長お気に入り作品の彼女と彼女の初仕事です。これからは温かく見守っていただければ嬉しいです。

(新副蔵長・福原僚子)

〔絵金蔵〕

開館時間

午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)

観覧料

大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)

休館日

毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日～1月3日

絵金蔵の三つの使命

年に一度
：絵金の文化を
守るため
伝承
：次の世代へ
伝えるため
縁結び
：地域を超えて
世代を超えて

絵金蔵



幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。



安政5年（1858）銘 南国市片山公民館所蔵
…子別れの場面



赤岡町本町四区所蔵 河田小龍作
…去ってゆく当吾



高知市郡頭神社奉納保存会所蔵
…子供の前で拷問に

この後、怨霊となった当吾一家の復讐場面となり、この場面を描いた芝居絵も県内に残されています。
初演時の仕掛けでは礎柱を背負った当吾一家の幽霊が現れ、その復讐のすさまじさは観客をうならせたと伝えられます。

参考：『絵金展』高知県立美術館図録 図版No.35

この他幕末、江戸で活躍した三代目歌川豊国（国貞）や、歌川国芳といった浮世絵師たちも、数多く佐倉惣五郎に関わる芝居絵を残しています。

絵金百話

第四話

ひがしやま さくらそうし

東山桜莊子

佐倉宗吾子別れ

二曲一隻屏風/紙本著色/176.0×162.0cm
歌舞伎狂言・時代世話物・三世瀬川如華作
嘉永4年(1851)8月 江戸・中村座初演

こんなにあった！？〈東山桜莊子〉



歌舞伎では数少ない農民劇ですがこの作品は三月月大入りの大ヒットとなり、その後も盛んに上演されました。
明治に入ってから時代設定が鎌倉から江戸になり、これが今日も上演される「佐倉義民伝」の台本の原型となります。

所蔵者の声

この絵は他のおどろおどろしい絵と違って、別れを描いた悲しい絵。絵金の屏風絵はこれまで、町内持ち回りで空いている蔵や、時には土間などに保管され、祭りの時以外に開くことは全くといっていいほどありませんでした。幼い頃から祭りの風景に接していたので、屏風絵は刺身に例えればツマのようなもの。ごくあたりまえの存在でした。それでも子供心に色の鮮やかさや線の鋭さをすごい、と感じていたことを覚えています。（所蔵者のお一人、島崎さんに伺いました）

〔参考文献〕
『日本伝奇伝説大事典』角川書店 1986年10月
『歌舞伎事典』平凡社 1993年4月
『国立劇場所蔵 芝居版画等図録Ⅱ』国立劇場 1980年
近森敏夫『絵金読本』赤岡町・赤岡町教育委員会 1995年7月
『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年



無邪気に笑いかける子供たちから顔をそむけ、赤い血の涙を流す当吾。



赤岡町本町二区所蔵



嘆き悲しむ妻



ぼう然と父を見上げる子供の頬には涙が一筋……よく見ると赤で描かれています。（モノクロでしかお見せできなくて残念。）

近森敏夫氏は「この作品の流行は義民佐倉宗五郎の〈五郎〉が御霊の音に通じることから、農漁村での凶作悪疫の災難を払った民間信仰の根がふかくしみこんでいる。」（『絵金読本』）と述べています。芝居絵のみならず、この物語は草子や講談などに数多く取り入れられました。
大ヒットの背景を、民俗や信仰といった視点から探ってみるのもおもしろいかもしれませんね。



江戸前期に起きたと伝えられる下総国佐倉領（現、千葉県佐倉市）の名主、惣五郎の直訴事件に取材した講釈『佐倉義民伝』と柳亭種彦の草双紙『修紫田舎源氏』とを組み合わせ、時代を鎌倉時代に移して脚色したもの。

領主の悪政に苦しむ農民たちがたまりかねてその窮状を訴え出たところ、反対に投獄されたため浅倉当吾（佐倉惣五郎または宗五郎とも書く）は將軍への直訴を決意し、家族に最後の別れを告げるため、故郷に向かう。

この絵は渡し守甚兵衛の助けで家に帰った当吾が妻子と名残を惜しむ様子を描いたもの。降りしきる雪を背景とした愁嘆の場面で、歌舞伎の演目中「葛の葉子別れ」「重の井子別れ」と並ぶ三大子別れの一つとされる。

この後、当吾一家は捕らえられ、拷問の末、惨殺されるが、怨霊となって領主に復讐を果たす。



はじめまして！
蔵通信専属解説員
かなえです。